チャック・クライシス

雪路

『スピードグルー全面規制へ

二〇〇七年一二月七日より、卓球のラケットにラバーを接着するために用いられる揮発性有機接着剤スピード・グルー（通称チャック）の公式試合での使用を全面的に禁止することを、ＩＴＴＦ（世界卓球連盟）は発表した。

　ラバーを貼りつける接着剤によって打球のスピードやスピンが改善されることが発見されたのは一九七〇年代のことで、ハンガリーのティボル・クランパ選手がこの効果を利用して試合に臨んだ最初の選手であると言われている。接着剤に含まれる有機化合物のトルエンが揮発することでラバーが膨張し、その分だけラバーが引っ張られている状態（トランポリンの布地を強く張ったのと同じ状態）になるため、反発力と摩擦力が向上するという仕組みである。今回最も問題視されているのはこのトルエンが持つ毒性である。トルエンには強力な発がん性とともに中枢神経を麻痺させる作用があり、蒸気吸引等で摂取することにより酔っぱらい状態に陥る。閉所でトルエンを含む有機溶剤を使用して長時間作業を行うことで急性中毒を引き起こす事例もあり、軽度であれば悪心・頭痛・嘔吐・倦怠感などが起こり、重症になると運動機能異常・意識消失・知覚異常などが起こり、最悪の場合、呼吸困難に陥り死に至ることもある。また生きていたとしても中枢神経の変化を起こす可能性が残るとも言われている。またトルエンは強い依存性を持っており、吸引常習者は感情不安、意識障害、幻覚、妄想、一時的意識喪失などの症状が現れることも知られている。

スピード・グルーは五パーセントのゴムと約九五パーセントのトルエンで構成されており、かねてより健康被害を心配する声が上がっていたが、先日の高校卓球部部員による殺人事件の発生経緯を考慮して、ＩＴＴＦの柴田会長はついに規制の決定を下すこととなった。すでにスピードグル―が浸透している選手たちの間で、打球感が大きく変わることに不満の声が上がることが懸念される。

（卓球マガジン二〇〇七年一一月号より）』

四条高校男子卓球部、部員総勢十四名。そのうちの五名はあまり卓球に興味のないアニメオタクの集まりで、今日も放課後の練習はそこそこに今期の深夜アニメについての談議に花を咲かせている。三名は数少ない真面目でやる気のある卓球部員であり、今も市民体育館の萎びた卓球台で練習に励んでいる。そして残りの六名（今日のところは一名欠員で五名だが）はかび臭い用具室の片隅で紙袋に鼻先を突っ込んでいる。

「昔はこんな感じでシンナー吸うことをアンパンって言ったらしいね」

　紙袋から二枚目俳優じみた顔を上げて、櫻木は言った。その場で一緒にチャックを吸引していた田村、三田、宮越の三人は、三人とも揃ってとある人物の姿を脳裏に浮かべた。野嶋のことである。野嶋の常に赤らんだ頬や何かしらの炎症で腫れぼったくなっている鼻、そして丸い輪郭がアンパンマンにそっくりだったからだ。そして当の野嶋もまた、彼らの輪の中でチャックを吸引して恍惚としているのであった。

「それまんま野嶋のことじゃん」

　タバコとチャックを交互に吸引していることで、この場では最も正常な判断力を失っていた宮越がゲラゲラ笑いながら野嶋を指さした。その次の瞬間、

「アンパーーーンチ」

　と叫んだ野嶋が石というよりはちょっとした岩に近い彼の拳を宮越の横っ面に叩き込んだ。小柄な猿のような体躯の宮越は二メートル近く吹っ飛んで顔から床に着地した。そのまま這いつくばっていた宮越だが、しばらくするとなにごともなく身を起こした。口の端を切ったらしく、日常ではなかなかお目にかかれない量の血がだらだらと流れているが、宮越は相変わらず幸せそうな笑顔のままであった。痛みを感じなくなってしまっているのである。

「そういえばキヨシって今日どうしたの」

　二人のやりとりに震え上がった田村が話題逸らしのために口を開いた。キヨシとは部員の一人であり、いつもは彼らと一緒にチャックを吸って遊んでいるのだが、今日は姿がなかった。

「警察にパクられたらしい」

　事もなげに答えた三田を、他の三人（宮越は聞いていないようだった）はぎょっとして睨んだ。

「チャックがばれたのか」

　代表して聞いたのは田村だった。彼は結構いいところのお坊ちゃんであり表向きは素行優良で通っている。性格的にも神経質で心配性な気の小さい男で、チャックを吸うのも仲間に合わせているだけで内心はおっかなびっくりであった。

「いや、公園で火遊びしてたらちょっとした山火事を起こしちゃったらしい」

　それを聞いて安心した田村は、心臓にいらぬ負担をかけさせられた腹いせにキヨシの頭の悪さをまくし立てるように罵倒しはじめた。他の者も加わってキヨシの悪口大会が始まった。揮発した有機溶剤特有の饐えたような臭いとけたたましい笑い声に包まれた用具室はさながらアヘン窟の様相を呈しつつあった。

「あの……失礼します……」

　立てつけの悪い引き戸を音を立てながら開けて一人の男子が用具室に入ってきた。青白い色合いや頭の形が瓜にそっくりな細長い少年だった。

「あー、ヒデ呼んでたの忘れてた」

　埃やなんだかわからない汚れに塗れた床で仰向けになっていた宮越が、頭だけを起こしてヒデを見た。ヒデは一応は真面目でやる気のある部員の一人にカウントされるが、内気で卑屈な性格のせいでどのグループにも馴染めず、真面目に練習に参加するポーズを取っているだけであった。また卓球は基本的に偶数人で行う競技であるため、三人しかいないまじめ組のなかでも社交性に欠けるヒデはハブられ気味であり、こうして宮越たちに貸し出されることが頻繁にあった。

「飲み物買ってきて飲み物。人数分ね。お金は貸しにしといてあとでまとめて返すからさ」

　寝ころんだままの宮越が正気を取り戻し早口でパシりの指示を出した。

「…………です」

　それに対してヒデが俯きがちに何かを言ったが、声が小さいうえに震えているせいで誰も聞き取ることができなかった。

「は？　聞こえねーぞ」

　野嶋が不機嫌そうな顔で威嚇したためヒデは更に萎縮してしまい、相変わらず念仏を唱えるように何かを呟いているがやはり聞き取れない。痺れを切らした宮越が足を振り上げて床に叩きつける。生き物の悲鳴じみた大きな音がして、舞い上がる床の埃といっしょにヒデは床から一センチほど浮いた。

「お金がないです」

　ヒデが足元に向かって絶叫した。

「俺たちもないから貸してつってんだけど」

　この中では一番金持ちな田村が凄んだ。

「お金がないので……買えません」

　ヒデは再び縮み上がる。

「じゃあパクってこい」

　万引き歴一〇年目の三田が、さも当然のように言い放った。それにあわせて野嶋が拳を鳴らす。

「……できません……」

「大丈夫だよ。僕たち未成年なんだからさ。少年法なんてガバガバだしキヨシみたくぶち込まれてもすぐ出てこれるって。やりたい放題。ボーナスタイムだよ」

　二十まではボーナスタイム。悪徳少年櫻木の口癖である。

「…………できません…………」

　この世のおわりに直面したような顔でヒデが声を絞り出すと、宮越がハンドスプリングで身を起こした。

「ヒデ、ちょっとそこに立って」

　宮越が壁際の一画を指さすと、ヒデは極めて小さな歩幅で指示された場所に歩いていった。

「じゃ、服脱いで待ってて」

「服……」

「いいから脱げって」

「何を……するんですか」

「乳首当てゲーム」

　服を脱いでやるのかと誰もが疑問を抱いた。

　ヒデがおずおずとＴシャツを脱いで上裸になったのを確認すると、宮越は用具室の奥からおんぼろの球出しマシンを引っ張り出してきてセッティングし始めた。全員が宮越の意図に気づいた。ヒデのもともと青白い顔から更に血の気が引いて脂汗が浮かぶ。

ほれいくぞーという掛け声とともに宮越がマシンを起動した。空気が抜けるような音を伴って明らかに人間のものではない球速のピンポン球が射出され、ヒデのヘソのあたりに命中する。「ピッ」という電子音のような悲鳴があがった。宮越たちからは歓声があがった。

「これさ、ぶっ壊れてて、球速が最大のまま変えられないんだよね。申し訳ないね」

　全く申し訳なくなさそうな表情で角度を調整している宮越が言うと、二つめの球がヒデを目がけて飛び出した。今度は肋骨が浮いている青白い胸郭に命中して赤く跡を残した。なかなか当たんねーなと文句を垂れながら宮越は角度調整を続ける。球は一定間隔で自動的に発射され続け、そのたびにヒデは悲痛な鳴き声をあげた。おれにもやらせてくれよと宮越を押し出した野嶋を皮切りに五人は代わる代わるマシンを操作してヒデの乳首を狙った。果てにはヒデの身体にマジックペンで的を書き、頭のいい櫻木が場所ごとにポイントを決めルールを整備した。自分が考案した乳首当てゲームのウケの良さに宮越は終始満足げであった。

　九月も末となり、日没の時間はだいぶ早くなっていた。女子卓球部の活動が終わり、市民体育館の玄関を出たところで、用具室から借りたボールを返し忘れたことに気づいた水野は来た道を引き返しているところだった。過疎地の体育館らしく四条高校の卓球部以外に利用者は全くおらず、薄暗い館内においては管理事務所の窓口から漏れる不自然なまでに明るい蛍光灯の光が不気味さを醸し出している。水野は二階の卓球場用具室へ向かうため、足早に階段を上った。その途中、

「うぅぅぅぅ……」

　というすすり泣くようなうめき声が用具室から聞こえることに気づいてしまった。下手な怪談話のようなシチュエーションに戸惑いすら感じつつも、年ごろの少女らしい恐怖心をしっかり備えていた水野は外で待っている友人たちのもとへ戻ろうか迷った。こんなことなら待たせずについてきてもらえばよかったと心底後悔していた。

「誰かいらっしゃるんですか」

　一応のため用具室の扉に向かって呼びかけてみるが、反応はない。うめき声が漏れるだけであった。これはいよいよまずいことになったかもしれないと水野は思った。良識人の彼女にはそのへんにボールを放置して帰るという選択肢が浮かばなかったからだ。ため息をつき決心を固めると、水野は引き戸に手をかけ一気に開いた。中にはぼろ雑巾のようになって打ち捨てられたヒデがいた。上半身裸のまま床に顔を伏せてすすり泣いている。

「えーと、中島くんだよね」

　ボールを箱に納めつつ声をかけてみるも、ヒデから応答はない。ケガをしていたら大変だと思った彼女は念のためヒデに近づいて身体を確かめた。

「ケガとかしてない？　てか起きないの？」

「……起きられない」

　ヒデはようやくまともに返答ができるようになっていた。しかし上半身に描かれた的や球の跡を見られたくないという羞恥心から身体を起こせないでいた。水野はそれなりに目を引くような美人だったため、ヒデも少なからず意識しているのであった。

　一方の水野とはいうと、どこまでも良識人であるため何となく事情を察して、落ちていたヒデのＴシャツを拾い上げ彼の肩にかけてやっていた。

「まあ、人生いろいろあるよね。がんばって」

　ヒデをのぞき込むようにして水野は言った。水野としてはかなり雑に励ましたつもりであったが、今のヒデには絶対求婚しようと決意するほどのやさしく暖かい言葉として受けとめられていた。ここでようやくヒデは顔を上げて水野の顔を見た。端正に引き締まった顔つきでありつつも、表情は慈愛に満ちているようにヒデには見えた。天使だと思った。

　じゃあねとヒデに背を向けて水野は用具室を出ていった。ヒデはしばらくの間、水野との短い会話を胸中で反芻させてまた少し泣いた。

　数日後、ヒデは市民体育館の男子トイレの個室に籠って頭を抱えていた。戸の向こう側では凄まじい怒号と、何かが戸に強くぶつかる音が響き、個室全体を揺らしていた。四条工業高校卓球部の男子二人がヒデが入っている個室の戸を蹴りまくっているのだ。

「ごらぁ三田ぁ出てこいオラァ！」

　僕は三田ではありません僕は三田ではありません僕は三田ではありません……とヒデはひたすら唱え続けていたが、か細い声は騒音にかき消されて全く聞き取ってもらえなかった。ヒデはトイレの戸がぶち破られませんようにと必死に祈りながらどうしてこんなことになったのか考え始めた。

　今日はいつも練習で使っている市民体育館で卓球の市民大会が行われていた。ヒデは体育館の玄関をくぐるなり、いきなり正面から野嶋の分厚い手のひらで肩を掴まれた。

「ヒデくん。ゼッケンをつけてあげよう」

　野嶋が気持ちのわるい笑顔で言い放つと、いつの間にか後ろに回っていた三田がヒデのエナメルバッグからゼッケンをとりだしていた。ヒデが硬直していると確かに三田は彼の背中にゼッケンを取り付けているようだった。

「これでよし。今日はがんばろうぜ」

　三田はそう言うとヒデの背中を掌ではたいてから野嶋を連れて去って行った。大会に彼らが参加することは極めて珍しいためヒデは大層不審に思ったが、そのときはまだ何の被害も受けていなかったため気に留めないことにしていた。問題はそのすぐ後に訪れた。

「三田ァァァ」という凄まじい怒鳴り声が後ろで聞こえたかと思うと、ヒデは後頭部に強い衝撃を受けてタイル張りの床に突っ伏した。突然のできごとに理性が着いていけず、後頭部にあるはずの痛みさえ認識できなかった。反射的に振り向くとガラの悪い高校生が二人立っていた。一人はペプシのロゴマークが入った長細い看板のようなものを持っていた。見覚えがあるなと思い凝視して、気づく。それは体育館に設置されいてるベンチの背もたれだった。どうやらこの男子はベンチから背もたれを引っこ抜いてヒデの頭を後ろから打ったらしかった。夢か何かじゃないかとヒデは現実を疑いだした。

「金はどこにやった」

　手ぶらの方の男子が荒い口調で問うてきた。

「…………金？」

「とぼけんな。さっさと金を出せ」

　もう一方が背もたれで床を強かに打ちつけた。ヒデは彼らの言っていることの意味がまるでわからなかった。だがわからないなりにこれは逃げた方が賢明だと判断して身を跳ね起こすとトイレに向かってダッシュした。後ろから二人の男子が猛然と追いかけてくるが、背もたれが邪魔になってヒデに追いつくことができなかった。ヒデはトイレに着くなり一目散に一番手前の個室に飛び込んで鍵を閉めた。するとちょうど二人が滑り込んできてヒデの入っているトイレの戸をめちゃくちゃに蹴りだした。響く怒号に「四条工業なめてんのか」という言葉が混じっていて、どうやら自分は四条工業の金に何かをしてしまい追いかけられているらしいということがわかった。が、金とやらに全く心当たりがなかった。ヒデはうめき声を上げながら頭を抱えて俯いた。背中でゼッケンが張る感触がした。はっとしてゼッケンを外し検める。名前の欄には明朝体で『三田』と刻まれていた。涙が出てきた。後頭部にじんわりと暖かい感触がして、手を触れてみると濡れていた。血も出ていた。

　それからずっとヒデは個室のなかで頭を抱えていた。老朽化が進んだトイレの戸はそう長い時間持ちそうにもなかった。もう警察を呼ぼうと思い携帯電話が入っている鞄の小ポケットに手を突っ込む。携帯電話は入っていなかった。ヒデは焦ってトイレの中であることも構わず鞄の中身をひっくり返すが、どこにも携帯電話はなかった。ついでに身分証が入っている財布もなかった。ヒデが知る由もないことであるが、それらは既に三田が抜き取ってしまっていたのである。打ちひしがれたヒデは再び頭を抱えた。

　ヒデがトイレに籠っている一方で、櫻木たちは大会をフケて近くの公園でチャックを吸っていた。彼らの足元にはラバーを剥がされてただ木べらのようになったラケットが散乱している。吸引する有機溶剤としてのチャックの利点は、スポーツ用品店で簡単に購入できることの他に、吸っているところを見つかってもラバーの張替をしていたと言い逃れができるというものがあった。

「でもこれがバレたら俺たち私刑だよな」

　札の枚数を神経質に数えながら田村が言った。いつもなら彼の小心者っぷりを内心でバカにするところであるのだが、今回ばかりは三田も確かにと頷いていた。

「全部計画通りに進んでいる。大丈夫だよ」

不安げな二人を宥めすかす櫻木は、その実、ヒデを陥れた張本人でもあった。

ヒデの不幸が始まったのは市民大会の一週間ほど前のことだった。櫻木は四条工業の部長にとある賭博をしようと持ちかけたのである。市民大会の個人戦におけるトーナメントの順位を競馬のごとく予想し合い、実際の結果に近かった方がかけ金を総取りするという単純なルールだが、かけ金の設定額は二〇万円、高校生たちが動かすには十分に大金と言える額である。しかし、悪徳のカリスマである櫻木がこんなリスクの高い賭けを五分五分な勝負に持ち込むわけはなかった。優勝候補である強豪校のエースたちを収賄して回ったのである。ごく小規模な寂れた市民大会で良い成績を収めたところで、権威や栄光が得られるわけでもない。それなりの賄賂を持ち込まれた彼らは喜んで八百長に加担した。この市民大会は櫻木にとって必勝の賭場であるはずだった。しかし、運命の大会当日、意気込んで会場入りした櫻木たちは思わぬの事態に見舞われた。一位、二位、三位に収めるはずだった選手たちが軒並み体調不良を理由に大会を棄権してしまったのである。

「あれ絶対に工業のしわざだよな。きたねーやつらだ」

　自分たちのことは完全に棚に上げて拳を鳴らし憤る野嶋に、しかし櫻木は微笑んで言った。

「尊い犠牲のおかげで金は失わずに済むんだし、いいじゃないか」

　尊い犠牲とは言うまでもなくヒデのことである。問題が発覚してからの櫻木によるリカバリは極めて迅速だった。そもそも彼にとっては工業側による収賄返しすら半ば想定内のものであったのだ。選手たちの棄権を知らされると、櫻木はすぐに三田へ工業側のかけ金を盗難してくるよう指示した。工業の会計係がかけ金を預かっていることはすでにリサーチ済みであり、常習犯の三田がそれを後ろからひったくりで盗み出すのは容易なことであった。また、櫻木の指示はそれだけではなかった。事に及ぶ際、わざと三田に彼のゼッケンを着けっぱなしにさせ、金を盗んだのが「四条高校の三田」なる人物であることを工業側に周知したのである。そして、三田の名を喚き散らしながら体育館を駆けずる工業生たちを尻目に、ゼッケンを取り替えることで「四条高校の三田」の看板をヒデに背負わせたのであった。あとは日が暮れるまでヒデを工業生にリンチさせ続け、大会の結果発表がなされたのを見計らって「四条高校の三田」が隠していた二〇万円を櫻木たちが見つけてきたという体裁で工業の卓球部に返済し、賭博そのものをうやむやのまま無効にしてしまう。これが櫻木の考案した対応策の全貌であった。ヒデは何も知らない間に、そのためのスケープゴートとして仕立て上げられてしまっていたというわけである。

「いやしかし、櫻木が天才で助かったぜ。やっぱり部費で吸うチャックほど美味いものはないからな」

　金持ちのくせにドがつくほどのケチである田村は安堵の息を漏らした。櫻木たちは多額のかけ金を部費から捻出していたのである。「いやいやそんなことは」と謙虚に振舞いながらも、櫻木は我ながら上手く事を運べたと内心で自画自賛の真最中であった。そこへ、

「おーい大変おもしろいことになってんぞー」

　と宮越が駆けてやってきた。彼は櫻木と同様に工業の卓球部にコネがあり、それを使って内情を偵察しに行っていたのだった。

「おもしろいことって、なに」

　櫻木は胸中に嫌な予感を広めながら聞いた。ラリった宮越は何をしでかすかわからないからである。

「それがさ、工業の奴らに追い詰められたヒデがトイレに立てこもっちゃったらしくてなかなか出てこないって言うからさ、一つアドバイスしてやったわけよ。三田は女子の部に出てる水野って女に惚れてるから、そいつを人質に取れば一発だって」ここ最近のヒデが事あるごとに陰から水野をガン見していることは、櫻木たちの間で笑いの種になっていた。「さすがにね、俺も半分冗談のつもりだったんだよ。これでも良識あるほうだしさ。女子を埒って監禁、こればっかりはただじゃすまないってことぐらいわかるんだよ。でも工業の奴らときたら、なんと、なんとね――マジで水野をさらっちまったんだよ」

　言い終えるや否や抱腹絶倒とばかりに笑い出した宮越を、櫻木は射殺さんばかりに睨みつけた。嫌な予感はみごとに的中したのである。

「とんでもないことをしてくれたな、宮越」

　尋常ならざる櫻木の剣幕に当てられて、宮越はピタリと押し黙った。他の三人も事情がよく呑み込めないままそれを見守っている。

「え、とんでもないこととはなんですか」

　萎縮した宮越は数年ぶりの敬語を使った。その知能の低さにもはや憐憫の情すら抱きながら櫻木は説明する。

「きみの言うことがほんとうなら、水野は今工業の連中のところにいるんだろう」

「はい。そうなりますね」

「水野に釣られて出てきたヒデはどこに連れて行かれると思う？」

「工業の連中のところですね、あっ」

　宮越はようやく己の大きな過ちに気づいた。

「水野とヒデがそこでばったり出会ってしまったらどうなる？」

　うしろで話を聞いていた田村は早くも卒倒していた。

「……ヒデのことが工業の連中にバレれますね」

　チャックで脳が縮みきってしまったアホ猿と会話ごっこをしている場合ではない。早急に手を打たなければ。櫻木は工業の部長に電話をかけ、とある「提案」をした。

　水野が人質にとられている。そう聞いたヒデはさっきから顔に浮かべていた絶望の色をさらに深めた。五臓六腑が冷え渡り全身から脂汗が噴出する。人質などという単語を現実で耳にすることになるとは思っていなかったのだ。

まず他人を人質とるとはどういうことなのか。ヒデにはそこから理解することができなかった。自分が出ていかなければ水野は死ぬのだろうか。いや、死にはしないだろう。高校生が扱える額の金では、とてもではないが殺人を犯すリスクに見合うとは思えない。だが自分が出ていかなければ、水野がひどい目に合うことも確実だ。こんな野蛮な連中のことだ。何をしでかすかわかったものじゃない。

　ヒデはずっと抱えていた頭をもたげ、改めて目の前にあるトイレの戸を見た。厚くはない木製の戸を一枚挟んで、相も変わらず怒号が飛び交っている。蹴っているだけでは埒が明かないと判断したのか、工業生たちは戸に対して体当たりをかましはじめたようだった。戸はみしみしと軋み、蝶つがいの金具が悲鳴をあげている。まるで猛獣だ。出ていけば軽めに見積もっても八つ裂きにされる。しかし三田が正直に名乗り出るか、自分が出ていくかしなければ水野が八つ裂きだ。あの三田が出頭するわけがない。自分が出ていかなければ水野は八つ裂きだ。あの天使の水野がだ。たっぷりと時間をかけて、ヒデは個室から出る決意を固めると便器に嘔吐をした。胃の内容物を全て吐き出してもストレスが彼の胃を締め上げて延々と胃液を吐き出させた。

「……あの、出ます」

　やっとの思いで戸の向こう側にいる彼らに話しかけるも、同時に水を流したせいで聞こえていないようだった。

「……出ます……出ます！　出るので殴らないでください！」

　ヒデが全精力をかけて声を張り上げると、騒音はピタリと止んだ。ヒデは震える手で鍵を外すと、戸をゆっくりと内側に引いていこうとしたが、戸が数ミリ動いた瞬間に工業生たちは思いっきり蹴り開けた。弾き飛ばされたヒデは便器に背中を打ちつけ、その痛みのためにうずくまろうとしたが、工業生の一人に胸倉を掴まれたせいで叶わなかった。工業生はヒデを引き起こすと言葉もなく拳を一発頬に見舞った。ヒデは再び便器に背中をぶつけたが、すぐに引き起こされてまた殴られた。ぐったりしていると今度はベンチの背もたれが降ってきた。

　昏倒一歩手前の状態に陥ったヒデを工業生たちは二人がかりで引きずっていく。ヒデは朦朧としながらも自分が三田ではないことを彼らに知らせる方法を必死に考えていたが、すぐにその余裕もなくなった。タイルの上を滑っていた背中に何かの角がぶつかるような感触があったかと思うと、背中を削るような痛みがガリガリとヒデに襲いかかったのだ。ヒデが閉じていた目を開くと、彼は自分の視界がどんどん床から離れていっていることに気づいた。階段の上を引きずられているらしい。もはや人間扱いされていなかった。感覚がなくなってきた背中のことを案じながら、この人たちもチャックでラリっているのだろうなとヒデは思った。チャックなんてこの世からなくなればいい。心からそう思った。

　ヒデが運び込まれたのは彼にも馴染みの深い用具室であった。いつも彼らがお世話になっている用具室は四条工業高校卓球部のたまり場になっていた。占拠している高校は違えど用具室は相変わらずのアヘン窟であった。見える限りで十五人ほどの工業生に支配され、一角には立てた卓球台を衝立のようにして見えなくされている空間がある。

　ヒデは工業生たちの輪の中に投げ出された。まるで生きた心地がしない。恐怖に怯えながら這いつくばっていると、何者かと電話している代表者らしき人物が「完璧に仕上がったぞ。なんならお前らもやりにきていいぜ。じゃあな」と携帯電話を閉じて笑顔で話しかけてきた、

「どうも、部長の槙村です」

　槙村の坊主に近いショートヘアには所々剃り込みが入っていてどう見ても堅気の人間ではない風貌だったが、表情自体は穏やかなものであった。

「……こんにちは」

　なに呑気に挨拶してんだと脇に控えている部員がヒデの脇腹を蹴ったが、槙村の一瞥でその部員は萎縮したように引き下がった。

「はいこんにちは。もうここまでで散々ボコられてるだろうからな、穏やかにいこうや」

　意外と話が通じる人物なのでは、とヒデは少し希望が見えてきたような気になった。槙村は続ける。

「ところで三田くん。俺たちは未成年だ。何をやっても法的には大した咎を受けない。いわばボーナスタイムだな」

　櫻木と同じことを言う。もしかしたら知り合いなのかもしれない。

「まあそれでも人道的にやってはいけないことが一つだけある。何かわかるか」

「……人殺しですか」

「いや違う。他人様の金を盗ることだよ」

　人殺しくらいのことは簡単にやってのけると暗に脅されているのだが、もちろんヒデは全く気づいていない。所持品を失くしたせいでもう身分を証明することはできないが、槙村なら話くらいは聞いてくれるのではないかと極めて楽観的に考えていた。

「金はどこにやった。すぐに返せば今回のことは大目に見てやるし、水野さんも解放してやろう」

「盗って……ません」

　切り出すならここしかない。ヒデはそう思った。

「は？　寝ぼけてるのか？」

　槙村はそう言うと手近にあったチャックの徳用増量缶を取り、中身の全てをヒデの頭にぶちまけた。粘度の高い液体がとろとろと降り注ぎ、頭皮を滑りおちて顔全体に広がる。顎から滴っていった分で床にチャックだまりができる。吸引どころの話ではなかった。後頭部の傷が強烈に沁みて悲鳴をあげたかったが口を開くことはできない。目や口に入らないようにと濡れた犬のように頭を振るう。トルエン特有のスッとした臭いが鼻腔に充満してえずく。何が楽しくてこんなものを吸っているのかわからないくらいには不快な臭い。チャック塗れになったヒデを見て槙村たちは大いに笑った。

「目は覚めたか？」槙村がヒデの顔を覗きこむ。

「……お金を盗んだのは僕じゃありません。というか……僕は三田ではありません」

　もはや神に祈るような口調でヒデは言った。槙村の笑顔が消えた。表情が変わったとかではなく文字通り消失した。

「じゃあお前は誰なんだよ」

「中島英雄です……」

　チャックの臭いで再びせり上がってきた胃液を抑え込みながらヒデは答えた。胃酸に侵された喉が焼けつくように痛み、声がいつも以上に擦れる。

「ゼッケンには三田と」

「無理やり取り替えられたんです……。三田くんに」

「――それはちょっと苦しいだろ」

　槙村が取り巻きに何かを合図したかと思うと、二人の部員がヒデの両脇を抱えて立ち上がらせた。苦しい。とても苦しい。助けてくれ。これはいよいよほんとうに殺されかねない。ヒデはパンツのなかでしめやかに失禁した。

しかし、ヒデが連れていかれたのは断頭台ではなく衝立で隠されていた空間だった。そこでは卓球台の上に横たわっている水野が工業生に犯されていた。正常位でガンガン突かれているが、水野は虚ろな瞳から涙を垂れ流し続けるばかりで声一つあげない。すでに理性も人格も感情も全てが破壊されていた。その頭のすぐそばには、脅しに使われていたと思われるナイフが一本突き立っている。

「具合はどうだ、小暮」

「あ、槙村さん。こいつ上玉だけどチャック漬けにしたせいでもう完全にマグロですね」

　槙村に声をかけられた小暮は腰を止めずに振り返った。卓球のネットでぐるぐる巻きに拘束された半裸の水野は、確かに網にかかったマグロに見えないこともない。ヒデはそんな感想を抱いた。天使の水野が汚らしい男に犯されている光景を、どうしても脳で受け入れられないのだ。この惨状が櫻木によってもたらされたものであることを、ヒデが知る由はない。喋られて困るなら壊してしまえばいい。櫻木は槙村に「提案」したのであった。水野を人質だけではなく拷問の道具としても利用することを。

　　水野を助けるという当初の決意すらも忘れて茫然としているヒデの目の前で、小暮は「オラ！　ママになれ！」と射精して陰茎を水野からひき抜いた。これまで彼女を犯してきた工業生たちの精液が半壊した膣腔から零れ落ちるの見てようやく現実を認識したヒデは、もう何度目かもわからなくなった嘔吐をした。「でもやっちゃってよかったんですか。俺エイズですよ」「もう全員回したしいいだろ。その方が使えるしな」という槙村と小暮の会話も耳に入らず、ヒデはひたすら胃液を吐きまくった。

「そうだ、お前も犯れよ三田」

　槙村は思いついたように言うとヒデを立ち上がらせ下着ごとハーフパンツを引き下ろして陰茎を露出させた。ヒデはされるがままに水野の前まで進まされた。

「こいつ全然勃ってませんね」

「仕方ない”球出しマシン”を見せてやるか」

　槙村は水野の膣にピンポン玉を一つ詰め込んでから、ヒデの頭を掴んで水野の股の間に突き出した。

「よく見とけよ」

　槙村はそう言うと、水野の下腹部に拳を振り下ろした。「グッ」という水野のくぐもった悲鳴とともに、膣腔に溜まっていた空気に押し出されピンポン玉が飛び出しヒデの眉間に的中した。小暮がげらげら笑いながら「まだ勃ちませんよ」と煽ると槙村は数回”球出しマシン”を繰り返した。しばらくすると、ヒデの陰茎は彼の意に反して――もう半分意識はないのだが――雄々しく勃起した。これでよしとばかりに槙村はヒデを立ち上がらせると、無理やり水野に挿入させた。入口がだらしなく広がった水野の膣は容易にヒデを受け入れた。

「水野のまんこはどうだ。気持ちいいんだろう」

　ヒデの尻を蹴って無理やりピストン運動をさせながら槙村が問うてきたが、ヒデの精神はすでにストレスとチャックでほとんど破壊されているため、陰茎に這う水野の膣の感触を快感として認識できずにいた。彼は己の陰茎が水野の種壺を淡々と攪拌している様を見つめながらひたすらに考えた。自分は何をしているのだろう。櫻木たちにハメられて工業生に捕まり今は助け出そうと思っていた水野をハメている。わからない、わからない……。

「少年法なら強姦も大した刑にはならねえよ」槙村が何か言っている。

『接着剤に含まれる有機化合物のトルエンが脳の血管内で揮発することで』わからない。

「もっと楽しめ」槙村が何か言っている。

『脳が膨張し、その分だけ脳が引っ張られている状態（トランポリンの布地を強く張ったのと同じ状態）になるため』わからない。

「ボーナスタイムだ」槙村が何か言っている。

『ボーナスタイムになるという仕組みである。』わからない。

　どうして槙村が頭から血を流して床に倒れているのか、ヒデはすぐにはわからなかった。自分の手の中に血まみれのナイフがあるのを見てようやく、自分が槙村の頭をそれで裂いたらしいことに気づいた。そして、すぐそばで見ていた小暮が現状を正しく把握するのもほぼ同時だった。「俺はエイズだぞやめろ」と脅しなのか命乞いなのかわからない文言を叫んだ小暮にヒデは素早く近づき、首を絞めあげ黙らせると静かに腹部をめった刺しにした。槙村と小暮は死んだ。

　ヒデは衝立の中から出ていって用具室の中を見渡した。工業生たちが血まみれになって出てきたヒデを見てきょとんとしている。ヒデは全身の力を腹にためて雄たけびを上げた。

「――ボーナスタイムダァ！」

　まずいことになっているらしいとようやく気づき大慌てで用具室の出口へ向かい走っていく工業生たちに、ヒデはナイフを振り回しながら突撃していった。手前にいた者たちは無視して出口に一番近い一団をまとめてなで斬りにすると、すぐに反転して獣のように咆哮した。返り血とチャックでどろどろになった頭を鬼の形相で振り乱し「ボーナスタイムだ」と叫び散らしているヒデを前に、工業生たちは竦み、怯え、慄きと各々の方法で恐怖を露わにして悲鳴をあげた。その中から一人がヒデに向かっていく。ヒデをベンチの背もたれで殴った部員だった。彼はやはり背もたれを振り回してヒデに襲いかかるが、ヒデはそれを左腕で受け止めて身動きがとれなくなった背もたれの部員の手首をナイフで切り捌いた。悲鳴と血しぶきが噴き乱れる。ヒデの左腕は完璧に折れて関節が一つ増えたみたいになっていたが、トルエンとアドレナリンで脳が満たされているおかげで全く痛みを感じていなかった。この一幕を見ていた工業生たちは縮み上がり泣きべそをかき始め完全に抵抗をやめてしまったが、ヒデは「ボーナスタイムだ！　全員殺す！」と宣言し、失禁しながら命乞いをする工業生たちを宣言通り全員血祭りに上げた。

「フーッ、フーッ……」

やがて阿鼻叫喚は止み、獣の息遣いだけがヒデには聞こえた。誰のものだろう。耳をすます。自分のものだった。ヒデの心身はもはや人間のそれではなくなりつつあった。工業生たちの血と臓物が散乱した用具室のなかで、ヒデはひとり立ち尽くしていた。そこに、

「失礼しまーす。お誘いを受けたので水野さんをファックさせてもらいにきましたー」

　宮越の陽気な声とともに四条高校卓球部の面々が用具室に踏み込んだ。が、その凄惨な光景を前に五人とも思考と動作をピタリと停止させた。

新たな標的を見つけたヒデが身を低くしてナイフを構えるのを見て、一番最初に動きだしたのは野嶋だった。獲物持ちとはいえ所詮はヒデである。腕力で負けるはずがない。彼はチャックで侵された脳でそう判断するとヒデに殴りかかった。当然ながら判断ミスである。そもそもの話、真面目に練習するグループにいながら奇数人ゆえにハブられていたヒデは、活動時間のほとんどを走り込みや筋トレに費やしていたため、身体的なスペック自体はウェイトがあるだけの野嶋を遥かに凌駕していたのだ。除け者にされる悲しみの積み重ねが今の彼にとっては最大の凶器となっているのだった。かくしてのろまなアンパンチは空を切り、ヒデのナイフが脂肪で膨張した素っ首を切断して野嶋の頭と胴体はバイバイキンした。

「俺はチャックで痛みを感じなくなってるから大丈夫だ！」

　次に飛び込んできたのは宮越だった。命に関わらない腕でナイフを防御してその隙にヒデを制圧する算段であった。ヒデがナイフを構える。宮越は両腕で急所を防御する。そして目論見通り、ヒデのナイフは宮越の腕に突き刺さり「いっっっでぇぇぇぇぇぇ」宮越は悲鳴をあげながら血まみれの床をのたうち回った。アドレナリンの分泌量が足りなかったのである。太い血管を損傷した宮越はそのまま出血多量で絶命した。

　野嶋の生首と血液スプリンクラーと化した宮越の死骸を前に、小心者の田村は腰を抜かしてしまった。獣の本能に従って彼に飛びかかってくるヒデに対しての「金ならいくらでもやるから」という命乞いも虚しく、ナイフが胸部をひと突き。肋骨の隙間に滑り込んだ刃がその小さな心臓を抉り田村は即死した。

　チャックの吸引量が比較的少なく地頭にも優れた櫻木は、この場で最も適切な判断を下していた。逃走である。櫻木はショックで自失している三田の腕を引き「逃げろ逃げろ逃げろ」とまくし立てながら人のたくさんいるギャラリーに向かって走り出した。三田も我に返ってそれに従う。が、四条高校卓球部が誇る知将、櫻木を以てしても思わぬ誤算があった。ヒデの脚が速すぎるのである。正常な理性と痛覚を失ったヒデは、人体の限界を超過する運動により千切れかける靭や剥がれる足の爪を物ともせずに疾走。やがて三田に肉迫すると、その背中にナイフを突き立て容赦なく頸髄を破壊した。急に首から下が動かなくなった三田の身体は、手癖の悪さゆえに身に着けていた素早い逃げ足の勢いを殺せぬまま床を転げ回った。

　幾人もの返り血を浴びて真っ赤に染まったヒデが櫻木のすぐ後ろに迫る。ギャラリーには人がたくさんいることにはいるのだが、皆阿修羅のごときヒデの様相を見て逃げ惑っているばかりで助けてくれそうもない。櫻木はどうしてこんなことになっているのかを必死に考えた。こんなことがあっていいはずがない。まだ未成年の、ボーナスタイム真最中の自分たちがこんな無残な裁かれ方をしていいはずがない。野嶋、宮越、田村、三田……どうしてなんだ……。櫻木の優れた頭脳でも見つからなかった答えは、しかしすぐ背後からもたらされた。

「ボーーーナスタイムダァァァ！」

　ああ、そうか。これはヒデのボーナスタイムなんだ。人生最後にして最大の問いへの解を手に、櫻木の意識は途絶えた。

　全てを終えて用具室へ戻ってくるころには、ヒデは人間の心をほんの少し取り戻していた。脳内のアドレナリンが引いていき、負傷した箇所は徐々に熱を帯びつつある。

用具室に立ち入ると同時に、ヒデは膝から崩れ落ちてしまった。身体がもうだめになってしまっているのだとはっきりわかる。しかし、こうして床に這いつくばっているわけにもいかない。ヒデは近くにあったチャックの缶に手を伸ばして拾い上げると、中身をまとめて頭から被った。脳が発する危険信号を無視して、全身が活力を取り戻す。ボーナスタイムだ、ボーナスタイムだ……。自分に言い聞かせながら、死屍累々の中を這うように進む。

やっとの思いで衝立の中に入ると、水野は相変わらず卓球台の上で身じろぎひとつせずに横たわっていた。ネットを切って拘束を解き、槙村の死体から剥ぎ取ったジャージを被せてやる。水野は眠っているらしかった。そこら中に散らばっている死体と違うところと言えば、微かに呼吸をしていることと、ときどき思い出したように手足が痙攣していることぐらいであった。楽にしてあげよう。ヒデは血と脂で切れ味を失ったナイフを振り上げ、精液に穢れた水野の顔を見た。あの夜に見た天使と同じ顔がそこにあった。握力がふっと消失して、ナイフが床に落ちた。

ボーナスタイムは、もうおわりだ。

パトカーや救急車のサイレンが遠くに聞こえる。生きよう。ヒデはそう思った。